

俺様弁護士に
過保護に溺愛されています

桜井響華

Kyoka Sakurai



Eternity
BUNKO

目次

| | |
|---------------------------------|-----|
| 俺様弁護士に過保護に溺愛されています | 5 |
| 純情OLに一途に溺愛されています | 301 |
| 書き下ろし番外編 新妻になっても過保護に溺愛されています | 337 |

俺様弁護士に過保護に溺愛されています

プロローグ

付き合うまでは猛アピールだった同級生の彼氏。彼とのお別れは、実にあっさりとしていた。

『好きな子ができた。別れよう』

——そうスマホのメッセージアプリから送られて、それだけで六年間の交際が終了。突然そんな別れ方をされて、私は呆気にとられて茫然自失状態だった。

同じ大学に通っていた彼とは、お互いの友人同士の繋がりで出会い、初めて会ってすぐに私のことを気に入り、積極的に話しかけてきた。男性には縁がなく、これまで誰とも付き合ったことなどない。そんな私に『可愛い』だとか『好き』だとか、有頂天になるような言葉を初めて言ってきたのが彼氏だった。

最初のうちはただの同級生としか思えなかったが、次第にほだされて付き合うことになる。気遣いが上手で、優しいところと無邪気な笑顔が大好きだった。最終的には私の方がたくさん好きになってしまい、寂しい想いをしていた。

そんな時に友人から合コンに誘われる。私はお酒も弱いし、男性と上手く話せる自信もないので、合コンや飲み会は苦手。参加するのを迷っていたけれど、失恋には新しい恋だと周囲に押し進められて無理やりに連れて行かれる。

その時に出会ったのが、今の彼氏——年下の弁護士のお彼だ。

付き合い始めて三ヶ月が経ったある日の仕事で、ふとスマホを見ると、彼からニューヨークの弁護士になるには登録料が必要なので、お金を貸してほしいというメッセージが届いていた。

弁護士の彼はアメリカ留学中の身で、出会った時は一時帰国中だった。夢を叶えるために奨学金制度を受けながらも頑張っている彼氏に協力してあげたい。そう思ったものの、しかしその金額というのが百万円で、貸してあげたくてもすぐに答えを出せる金額ではなかった。

「う、わあっ！」

ガタンツ。勤めている区役所からの帰り道。ぼんやりと考えごとをしながら自転車で走行中、上手く曲がりきれず、私は体勢を崩して左方に倒れた。倒れたせいで自転車の下敷きになり、カゴに入れていたお弁当箱が入ったランチバッグが弾け飛ぶ。

腕と膝を道路のアスファルトで打ち、ジンジンとした痛みが身体を襲う。痛みにもがきながらもランチバッグが転がっていった方向に目を向けると、スーツ姿の男性が立っ

ていた。

「大丈夫ですか？」

男性はランチバッグを受け止めたあとに、倒れている私に近づき自転車を持ち上げてスタンドを立てかけた。そのあと、私にそっと手を差し伸べてくれた。

「起きられますか？」

「はい……っ、痛！」

ありがたく手を貸してもらい起き上がるうとした時、腕と膝の他に痛みを感じた。右の足首に重心をかけると痛みが走る。もしかすると足首を捻^{ひね}ってしまったのかもしれない。

「ひとまず、事務所の中に入りましょう」

スーツの男性に支えられて、建物の中へと入る。入口に掲げられた表札を見ると『瀬山法律事務所』と書いてあった。毎日通りかかる場所で、確かつい先日までは貸店舗となっていたはずなのだけれど……

転んだことに気を取られていてそれまで気にしていなかったが、ふと私の視界に男性が映った。整った顔立ちと細身の体型。大人っぽい印象と自分好みの顔やスタイルの男性に一瞬で心を奪われそうになった。次第に胸が高鳴ってしまふ。

「私は瀬山法律事務所代表の瀬山伊織と申します。開業したばかりで事務所の中が散ら

かっついて、すみません」

「いえいえ、そんなことはないですよ。こちらこそありがとうございます。あつ、私は野上杏沙子といます」

見慣れないと思っていたら、どうやら最近開業したばかりらしい。瀬山さんは私を椅子に座らせて、救急箱から湿布を探してくれている。

「応急処置になりますが、こちらをお使い下さい」

「ありがとうございます」

瀬山さんから冷湿布と不織布テープを渡され、痛い方の脚を折り曲げて、そっと靴下を脱ぐ。足首は赤く腫れていて、じっとして動かさなければ何ともないが、歩こうとすると衝撃で痛みが走る。

「この近くの整形外科は受付時間が終わっていますので、明日の朝に診察してもらった方が良いですね」

「そうですね……そうします」

湿布を貼る時に私が痛そうにしていたのを見た瀬山さんは、スマホでサッと近くの病院の診療時間や場所を調べてくれた。整形外科なんて滅多に行かないので、どこに行けばいいかわからないから、すぐに調べてもらえて良かった。思ったよりも痛いので明日はお休みして、おとなしく整形外科に行つて診察してもらおうことにする。

「コーヒーは飲めますか？」

湿布を貼ることに夢中になっていた私に、コーヒーを淹れてくれた瀬山さん。その真っ白なカップからは湯気が立っていて、芳しい香りが鼻を刺激する。

「ありがとうございます……！」

助けてもらった上にコーヒーまでごちそうになるなんて、親切にもらったご恩は忘れないようにしたい。

「事務所も今日は閉めようと思っていましたので、良かったら車で自宅まで送りますよ」

「え？ そ、それは悪いので大丈夫ですよ。ここからなら歩いて十分で帰れますので……！」

予想外の展開に慌ててお断りを入れる。これ以上は迷惑をかけられない。

「遠慮しないでください。どのみち、私も帰ろうかなと思って外に出ていたので」

「わー！ 重ね重ねごめんなさい！」

どうやらお仕事終わりで帰宅しようとしていたところに、私が転がりこんで来てしまったらしい。本当に何から何まで申し訳なくて、私もお返しをしなくては……と考える。

「あの、私にお手伝いできることがあれば何なりと仰ってください！ 私の脚が治りましたら、協力いたしますので……！」

こんなことしか思いつかないけれど、こうすることで少しでも瀬山さんのお役に立てたら嬉しい。

「んー、そうですね。では、お言葉に甘えて……この事務所はまだ開業間もなくて事務員がいらないんです。もしも、事務系の仕事を探している方がいたらご紹介していただけますか？」

瀬山さんは私の顔をじつと見ながら、柔らかく微笑んだ。無表情な美青年かと思っていたのだが、こんな風に優しく微笑むのだと知る。

ハプニングにより、突然知らない男性と二人きりになってしまったため、基本的なやり取り以外はお互いに視線を合わせないようにしていた。まだまだ大人になりきれなかった元彼と優しい雰囲気は今彼。二人と比較すると瀬山さんは落ち着きのある大人の男性そのもので、更にただならぬ色気まで感じる。

今まで周りにいなかったタイプの男性で、どうやら私は彼の内面の優しさと大人の魅力にひとめぼれしてしまったようで、心の中がざわめいていた。

「はい、探してみますね。でも、法律事務所って経験者でないと難しいんじゃない？」

テレビドラマで見たことがある。法律事務所として働いているパラリーガルは、弁護士の卵たちだ。一般事務の経験者でも法律関係ともなると尻込みしてしまうのでは？

「法律事務ではなく、その他の雑務と言いますか……」一般の事務処理から経理などをで

きる方を探しています」

「分かりました。それなら、案外早めに見つかるかもしれませんね」

「仕事量が安定しないので公に求人を出していなくて。もし心当たりがあれば、ご紹介いただけるかと助かります。よろしくお願います」

二度目の微笑みを向けられ、私の鼓動は速くなるばかり……

そのあと、無事に自宅まで送り届けられた私は瀬山さんを両親に紹介した。これまで一度も彼氏を家に連れて帰ったことがなかったので、両親は瀬山さんを彼氏だと勘違いしてしまう。

『本当に彼氏じゃないの?』と聞かれて慌てて否定したが、両親共に残念そうだった。

そりゃあ、私だって瀬山さんみたいな方が彼氏なら嬉しいけれど、私にとっては雲の上の人だもの。

……この時の私は今後、瀬山さんと自分の間に何が起こるのか、全く想像もしていなかった。

翌日の朝、整形外科で診察を受ける。案の定、捻挫ねんそくだった。職場にはバスで通勤し、

結局二週間で全治した。

珍しく定時で上がったある日、私は助けもなかったお礼をしようと瀬山さんの事務所に向かうことにする。甘い物が好きかどうか分からなかったので、伺う前にお気に入りのカフェでコーヒー豆を挽いてもらってから向かった。久々に瀬山さんに会える高揚感で胸の高鳴りが収まらないままに、事務所の扉を開ける。

「ああ、こないだの……」

私が誰なのか、瀬山さんはすぐに気づいてくれた。こんな些細なことでも嬉しくて、思わず顔が綻はなんでしまう。私には遠距離恋愛をしている彼氏がいるというのに、この胸の高鳴りは抑えられそうにない。

「先日はありがとうございます。おかげさまで怪我は無事に治りました。あ、これはお礼というか手土産のコーヒーです」

「無事に治ったみたいで良かったです。お土産もわざわざありがとうございます」

瀬山さんは私からコーヒーを受け取るとテーブルの上に置いてこう言った。

「せっかくだから、良かったら一緒にどうですか? ちょうど休憩しようと思つていたところなんです」

「もちろんです。キッチンをお借りしてもいいですか? お礼なので、私にコーヒーを淹れさせてください」

無事にキッチンを使う許可を得て、私がコーヒーを淹れている間、瀬山さんが座っている方向からタイピングの音が聞こえる。

「お待たせしました。このコーヒーは、近くにあるカフェのオリジナルブレンドなんです」「へえ、そうなんですね。すごく良い香りがする」

仕事をしている瀬山さんのデスクまで淹れたてのコーヒーを運ぶ。香りを楽しんでから、カップを口につけた瀬山さんはご満悦のようだ。

「コーヒーがお好きなんですか？」

「ええ、それなりに」

喜んでもらえて良かった。瀬山さんにカフェの場所を聞かれたので、地図を書いて教えた。瀬山さんはこの辺りの土地勘がなく、事務所の物件は不動産業者から紹介してもらった中で、たまたま条件が合って決めただけらしい。

瀬山さんと共にコーヒーを飲んでいると、彼氏からメッセージが届いていた。結局私は、お金を貸してほしいと言われてもどうすればいいのか決めかねて返事を保留にしていた。返信がないことを心配した彼氏からの催促メッセージだが、正直どうしていいのかわからない。貯金から支払えない金額ではないが、付き合ってから間もない彼氏にしてあげるべきか、否か……

「……あの、瀬山さんにお聞きしたいことがあるのですが、よろしいでしょうか？」

知り合ったのも何かの縁と思い、私は勢いだけで瀬山さんに尋ねた。活躍の場所は違えど同じ弁護士なら知っているかもしれないと淡い期待を込める。

「何でしょうか？」

「ニューヨーク州の弁護士登録料は百万円なのででしょうか？」

「私の記憶が確かならば、日本円で五万ちよつとだった気がしますけど」

私の頭の中が混乱している。五万円ちよつとと百万円では桁が違い過ぎる。

「どうかしましたか？」

「いえ……大丈夫です」

思い起こせば、合コンで出会った時に私のことをすごく気に入ってくれていたのもあるし、友人の勧めもあって気を許していたが、お金を請求されるのは実は初めてではない。もしかすると、もしかしなくてもこれは……

「こんなことを瀬山さんに聞くのもどうかと思うんですけど、留学先に戻る時に飛行機の搭乗券を入れた財布ごと落としたからお金を貸してほしいって言われたんです。その他にも色々あって、お金を貸しました。これって……」

「あー、詐欺じゃないですか。出してくれるかどうか少額から試していくタイプの詐欺」瀬山さんは、言い流すようにさらっと答えた。

やはり、そうなんだ。確かに少額から始まっていた。初めてのデートは、彼が私のた

めに選んでくれた可愛いカフェ。ここでは彼氏が全部支払ってくれた。二回目のデートは搭乗前。空港近くのホテルの高級なランチbuffetを私のためにと予約してもらっていたが、財布を落としたと言うので私が全額支払った。その他にも、留学先での生活が苦しいから参考書も買えないと言われて同情して送金をした覚えがある。

この彼氏は私の二歳下で、人懐っこく可愛いタイプの男性。特別好きという感情はない。……というのも、同じ合コンで友人が税理士の彼を見つけたので、じゃあ私も……となんとなく成り行きで付き合っていたような感じである。

今まで本気で好きになれる人にも出会わず、私はどうしてこう男運がないのだろうか？

「相談に乗りましょうか？」

心配そうな顔をして、瀬山さんが私に問いかけてくる。

「いえ、大丈夫です。ありがとうございます」

思い返せば、彼氏とは合コンのあとは二回しかデートをしたことがなかった。留学しているからだと思われて疑わなかったが、もしかしたらそれすらも嘘だったのかもしれない。付き合い始めた頃は電話も来ていたけれど、アメリカに戻ってからは国際電話が高額だからと、メッセージでしかやり取りをしていない。

——もう終わりにしよう。今まで支払ったお金のことは騒ぎ立てずに勉強代として諦

めよう。

メッセージの返信はせずに、このままフェードアウトすることを決めた。これでお別れだ。

その夜、友人に彼氏についての報告をする。すると、友人も同様の詐欺に遭いそうになっていた。私に相談しなかったのは、税理士というハイスペックな職業の彼氏を失いたくなかったからだそう。自分は騙されていない、必要とされている——

内心詐欺じゃないかと気づいていたけれど、友人はそうやって思い込むことで自分が傷つかないようにしていた。一方、私は騙されているのも気づかずに過ごしていたのだからどうしようもない。

どうやら、合コンに来ていたのは職業を偽って婚活女子を中心に騙している詐欺グループのようだった。

詐欺グループだと知ったのは、瀬山さんと話をした一週間程あとに『詐欺グループ、逮捕』というニュースをテレビで見たから。

区役所で働いていて、高齢者に対して詐欺に注意と促していた自分だったのに、何たる失態だろう。彼氏に対して思い入れがあったわけではないのに、情にほだされて騙されるなんて、自分が情けなくて仕方がない。

メッセージを既読しないままにしていたら、そのうち連絡は来なくなつた。大事に至る前に彼とはお別れして正解。思い切つて瀬山さんに聞いてみて良かった。

「こんにちは」

ドキドキしながら重い扉をそつと開けて、隙間から挨拶をする。例の相談した男性は詐欺グループで逮捕されましたよと瀬山さんに伝える名目で、私は定時に上がり事務所にお邪魔した。付き合っていると思つていた彼氏が詐欺グループの一員だったことはもはやどうでも良くて、ただこのことを口実に瀬山さんに会いたかつただけ。

「ああ、野上さん。こんにちは」

瀬山さんはすぐに私に気づいて、優しく声をかけてくれた。名前も覚えてくれたみたいで気持ちが舞い上がってしまう。

「あれ？ 瀬山さん、お出かけですか？」

「いえ、窓口に郵便を出しに行くので今日はもう閉めようと思つてました」

瀬山さんがスーツのジャケットを羽織つて、バッグを持っていたので尋ねると、どうやら郵便局に行く予定だつたみたいだ。

「私で良ければ行きます。大通りの郵便局は十八時まで受付してるんですよ」

「詳しいですね」

「ええ、私は区役所で働いていて、関係ないこともよく聞かれるので知つてるんです。時間がないので、お荷物お預かりしますね」

「いや、仕事終わったばかりなんでしょ？ ご迷惑かけてしまうので自分で行きます」「気にしないでください！ 私は用事ありませんし、早めに閉めてしまつたら、営業時間終了までの間に誰かが訪ねて来るかもしれませんので、瀬山さんは事務所にいてください」

「じゃあ、お言葉に甘えてお願いします」

私は瀬山さんから郵便物の他に切手の購入リストを預かつて、郵便局へと急いだ。瀬山さんが言つてた事務員とは、このようなことをこなす人かもしれない。法律事務はできなくとも、通常の事務業務ならば私にもできそうだ。

瀬山さんと一緒に働いたら、毎日が充実感でいっぱいになりそう。生まれて初めて、自分好みのうっとり見惚れてしまうような男性に出会った。それに少しのことも胸が高鳴り、なぜか温かい気持ちになる。

自転車で怪我をしたあの日から、会いたくてたまらなかつた。もっと、瀬山さんとお近づきになりたい。ふわふわして気持ちが落ち着かない。

ああ、きつと私、瀬山さんに恋をしたんだ――

「ただいま戻りました」

「野上さん、ありがとうございます」

私が事務所に戻ると、奥から瀬山さんの声が聞こえる。結局誰も来なかったのか、瀬山さんは給湯室でお湯を沸かしていた。

「コーヒードウぞ。昼間にクッキーをいただいたんですが、私は甘いものは食べないの
で、よろしければお持ち帰りください」

お客様用のテーブルにコーヒートを二つ並べた瀬山さんは、可愛らしいピンクの紙袋に入ったクッキー缶を私に差し出した。

「いえ、いただけません」

「いえいえ、遠慮なくもらってください。事務所は自分一人ですし、自宅にもクッキーを食べるような人はおりませんから」

押し問答をした末、ありがたくいただいて帰ることになった。瀬山さんの自宅にはクッキーを食べる人はいないということは、一人暮らしなのだろうか？ 彼女にあげれば良いのに、そうしないのは独り身だから？ 私は頭の中で勝手な解釈を始めていく。

「ありがとうございます。自宅いただきます」

私はにっこりと笑うが、瀬山さんは軽く頭を下げてただけで笑い返しもせず目を逸らす。

すると瀬山さんが、視線を外したままコーヒートを飲みながら、私にこう尋ねた。

「事務員として働いてくれそうな方は見つかりそうですか？」

誰かいないか考えてみたものの、瀬山さんの事務所の事務員の座を任せてもいいと思える方が見当たらなかった。人づてに探せば見つかるのかもしれないが、そんなことをすれば瀬山さんと二人きりの事務所で仕事をできる権利を受け渡すことになる。

「その件なんですけど……あのお、私じゃダメ……ですか？」

恐る恐る、聞くだけ聞いてみることにする。瀬山さんは私を見て驚いたような表情をしていた。

「野上さんは区役所にお勤めですよ？ こんな独立して間もない小さな事務所よりも、安定している区役所で勤務を続けてください」

やはり、思った通りに断られた。それでも、諦められない私は想いを伝えることにする。「自宅からも近いし、試験を受けたらたまたま受かっただけなんです。確かに安定はしますが、瀬山さんの事務所で働くことはやりがいがあると思っただけなんです。なので、お願いします！」

「そんなに簡単に決めてしまっただけで後悔はしないですか？」

「し……しません！ わ、私は瀬山さんと一緒に働きたいんです！」

区役所の安定感がある限り、普通に押しでもダメだと思った私はこんなことを口走っていた。

「私と？」

「そうです！」

もうなるようになるしかない。

「……珍しい方ですね。独立する前の事務所では周りから毛嫌いされていた私ですが、本当にいいのですか？」

こんなにも親切で、美貌とハイスペック要素を持ち合わせている方が毛嫌いされていたなんて信じられない。

「はい、瀬山さんと働きたいんです！」

「少し考えさせてください。それより、先日お伺いした詐欺の件はどうなりましたか？」

私の考えは変わらないので張り切って返事をしたが、話題を変えてはぐらかされた気もする。

「実は今日はその件で伺ったんです。その人、詐欺グループのメンバーで先日逮捕されました……」

「そうでしたか。その方は随分と色んな職種に就いていたみたいですよ。残念だな、

この事務所のクライアント第一号になってくれると思ったのに」

そんなことを言いながら、妖艶な笑みを浮かべる瀬山さん。不覚にもドキッと胸が高鳴ってしまったが、どこか違和感を感じてしまう。色んな職種に就いていたみたいだと言われたが、皮肉っているような気もする。

「まあ、百万円を払う前に気づいて良かったですね。相談料は無料なので、他にも何かあればいつでもどうぞ」

クスクスと笑いながら、私を見てくる。天使だと思っていたけれど、本当は悪魔なのか？

これが、私と先生の攻防戦の始まりだった――

一週間粘りに粘って、私は瀬山事務所の事務員として採用までこぎ着けた。

どうしても一緒に働きたくて、執念だけで仕事終わりに毎日通って、やっと説得に成功した。

区役所に勤めている私に対して、依頼が少ないとフルタイム契約でも定時割れの可能性があり給料面でも安定しないことを何度も確認される。しかし、一週間通った結果、

本気だと認められたようだ。

周りには瀬山さんのような紳士な男性はおらず、顔もスタイルも全てがドストライクだった。自分の好みの全てが瀬山さんだったとも言える。初めて自ら一緒にいたいと思っただ人で、歴代の彼氏のことなどどうでも良くなるくらいに夢中になってしまう。

このように不純な動機も含まれてはいるけれど、地域住民や瀬山さん本人を訪ねてくるとの方との関わりも多く、仕事内容は区役所で働いている時と根本的には変化していないと思う。瀬山さんのサポートをしつつ、事務仕事と格闘する日々によりがいを感じて毎日が充実している。

やっとの思いで働き始めて一ヶ月後のこと。

「先生……？ 起きてください！ 私は帰っちゃいますよ！」

働き始めてからは瀬山さんではなく、尊敬の意も込めて先生と呼んでいる。

いつの間にか、椅子の背もたれに寄りかかって先生は寝ていた。何度起こしても起きずに定時になってしまう。私は先にタイムカードを押し、先生が起きるのを待つことにした。

「先生！ 起きてください！」

「何だよ？」

うっすらと目が覚めた先生が、こちらをじっと見てくる。

「スマホの着信が何度も鳴りましたよ。もう定時を過ぎたので私は失礼しますね！」

ぐっすりと寝ていたもので、もう少しでも寝かせてあげたかったのだが、着信の間隔が短くなっていたので仕方なく起こすことにした。

「……ああ、もうそんな時間か！」

「目覚めのコーヒーを淹れたので飲んでくださいいね。では、お疲れ様でした！」

先生は寝起きで頭の回転が止まっているようだったので、コーヒーを淹れてから事務所を出た。

翌日に出勤すると先生は朝の挨拶もなしで、不機嫌そうに非難の言葉をぶつけてくる。「昨日、待ってなどいないでさっさと帰宅すれば良かっただろ！」

起きるのを待っていただけなのに、何故こうも機嫌が悪いのか私には分からない。

「ちゃんと出勤したあとだから、休憩しながら居座ろうと問題ないはずですよ？」

私は少しだけ苛立ってしまう。間違ったことはした覚えがないが、どうしてこうも朝から注意を受けるのが分からない。

「そうだが、起こしても起きない奴を待っているのは時間の無駄だろう。野上にとつて何のメリットもない！」

「メリットならありますよ。先生の寝顔が見られました。それから先生が寝ている間

に新規のお客様やクライアントの誰かが訪ねて来るかもしれませんから、スマホを見ながら留守番していただけですよ。仕事は一切してませんから、先生に注意をされたくないです」

私は笑顔を作りながら、きっぱりと自分の意見を主張した。

「そんなことはどうでもいい。勝手に遅い時間まで事務所に残って、夜道を歩くな。事件に巻き込まれたらどうするんだ」

「事件？　だって、私の家はここから歩いて十分で着きますよ？　それにその距離で事件に遭うとしたら、私がよほど不運なんでしょうから諦めます」

私が大丈夫だと思っていることに対して、先生は最悪の結末を想定している。以前に何かがあったのだろうか？　知りたいけれど、踏み入れてはいけない気がして、聞くことはできない。

「二度とそんなことを言うな。とにかく、仕事帰りに夜道は歩くな。絶対に、だ」

「分かりました。ごめんなさい」

朝から仕事以外のことで注意を受けて、思わずシユンとした顔をしてしまった。私はバッグを自分のデスクの椅子に置くとお湯を沸かしに行く。

「はい、お待たせしました」

先生のことは大好きなのだが、良かれと思ってしたことが裏目に出るなんて辛い。凹

み気味のまま、淹れ立てのコーヒーを先生に届ける。すると――

「……野上がいなくなったら、淹れ立ての美味しいコーヒーも飲めなくなるからな」

先生がボソツと呟いた。私はその言葉が耳に入り、一気に気分が晴れやかになる。

「私はいくありませんし、何なら定年までコーヒーを淹れ続ける気持ちで勤務してます！」

「……ここで働いていたら出会いもないかもしれないんだぞ。一生、独身でもいいのか？」

先生は間を置いてから答えた。

「わ、私には素敵な出会いがありましたけど……！」

「俺は子供に構って遊んでる暇はないんだ。男探しがしたいなら、他の場所で働け」

「分かりました！　その時はそうします」

売り言葉に買い言葉で、つい対抗してしまう。出会った当初はあんなに優しく紳士的だったのに、今となれば、悪魔のように冷たい日もある。夜道のことといい、子供扱いばかり。

「いや、その前に仕事を一人前にこなしてからにしてくれ。教え損はしたくない」

「何だかんだ言って、私のことが必要なんですね」

「そう思うのは個人の自由だ」

先生の本心は読めないが、受け入れてくれたのだから嫌われているわけではなさそう。

時折見せる優しさにキュンキュンしてしまう。まだ出会って間もない先生だけれど、私にとってはきつと運命の人。願わくば恋人になりたい。しかし、恋人になるには乗り越えなければならぬ壁があることをこの時の私はまだ知らなかった。

第一章 攻防戦の開幕

木枯らしが吹いて、肌寒い一日。この瀬山法律事務所には代表兼弁護士である瀬山先生と秘書兼事務員の私の二人しかおらず、険悪な雰囲気である。

「一人で留守番の時は営業時間外にして鍵を閉めておけと言ったのに、何故そんな簡単なこともできないんだ」

外回りから帰って来た先生が、呆れた様子で大きな溜め息を吐く。

「だって、閉めている間にお客様が駆け込んでくるかもしれないじゃないですか！ したら、お仕事を取り漏らしちゃいますし、いるのに不在対応だなんてお客様にも失礼かと……」

「言い訳はもういい。今後とも決まりが守れないならば辞めてもらう。それだけのことだ」

以前も鍵を閉めておくようにと指示されたが、同じように開けていた。その時も注意されたのだが、私は訪ねて来るお客様に対して失礼だと思っただけで逆らう。逆らったわりには来客はなく、更には今回は二回目で先生の機嫌を損ねてしまった。

どうして、私が一人の時は事務所を閉めなければならないのか理解できない。聞いても明確な理由を知らされないまま、毎日が過ぎていく。

先生の秘書並びに事務員として、瀬山法律事務所で働いている私は野上杏沙子、二十六歳。自転車で行く途中に怪我をして先生に助けってもらって以来、お世話になっている。

先生の名前を冠した瀬山法律事務所は小さいところなので、大きな案件などほぼ飛び込んでくることなく、日々細々と運営している感じ。

仕事内容も司法書士が介入できない金額の債務整理や自己破産、財産分与の裁判などが多い。

「全く！ 人選は面談等を経て決めるべきだったな」

ブツブツと文句ばかりを垂れ流している先生を上手く交わり、デスクの上に淹れたたてのホットココアを置いてみる。

「何だよ、コレは？ コーヒーにしてくれ」

先生が不満そうに私に訴える。

「ココアです。イライラしてる時は甘い方がいいですよ」

私は先生の言うことを無視して、事務仕事を再開した。先生は何か言いたそうにも見えるが、無言でカップを口に近づける。

毎日が激務だったという有名な法律事務所を辞め、独立した先生。出会ったばかりの頃に『毛嫌いされていた』と言っていたが、何となく分かった気がする。先生はお客様には優しく接するのだが、従業員には厳しい口調で接する。それでも私は先生のことを気に入り出したら止まらなくて、そんなギャップも含めて好きになってしまったのだ。

出会った日に一瞬で心を奪われた私は、振り向いてもらえなくても良いから先生の側にいたいと願う。働き始めて半年になるが、進展など何もない。むしろ、子供扱いされていて眼中にもなさそうだ。

「甘すぎる！」

先生は一口飲んだだけで文句を言い、冷蔵庫からミネラルウォーターのペットボトルを取り出して蓋を開けた。よほど口に合わないのか、一気にミネラルウォーターを喉に流し込んでいる。

「仕事中に甘い飲み物はやめてくれ！ 俺は仕事に刺激を求めているんだから！」

「すみません！」

ストレス緩和のために出した甘い飲み物は、かえって逆効果だったようだ。先生は自分でドリップコーヒーを淹れ始め、ほろ苦い香りが私のデスクに漂ってくる。

普段は目つきが悪い先生は依頼に来た方を怖がらせることが多いが、時としてプラスに働くこともある。少し俯き加減で髪をかき上げる先生からは大人の男のセクシーさが溢れており、私を筆頭に先生の魅力に気づいた女性は怖がるどころかキyunとするからだ。

キリツと整っている眉、奥二重のシャープな目、すつと鼻筋の通った鼻、薄い唇——左右対称の均整の取れたこの美しい顔に見つめられたら、女性なら誰でも虜になるだろう。

実際、債務整理の依頼にきた女性が先生のことを気に入ってしまい、離婚騒ぎになったこともあった。

しかし、クライアントとの約束もなく、事務所にいるだけの日は、裁判中のようにキリツともしていない。髪型もワックスで毛流れを作るわけでもなくサラサラ前髪のままだし、常にノーネクタイでシャツの第一ボタンは開けっ放しなので、やる気すら感じないのが難点なのだ。

「暇だから、お前が俺に刺激を与えてくれないんだぞ？」

先生はコーヒーカップを私のデスクに置き、隣の椅子に座って肩を組んできた。

「え？ な、何言って……」

先生にこんなにも近づかれたことはないので、私の鼓動は速まるばかりで落ち着かな

い。ドキドキしすぎて肩も竦む。

「……暇つぶし、するか？」

耳元で囁かれるように呟かれる。もうダメだ、緊張してどうにかなくなってしまいそう。先生の吐息が耳元にかかり、くすぐったい。

「あ、あの……暇つぶしって？」

声を絞り出し、問いかける。

「何だと思う？」

何だと思うと聞かれても、答えようがない。男女が二人きりの暇つぶし。ついつい想像するのは、いかがわしいこと。先生は私から離れる様子もなく、ついに男女の関係になるのか？ と頭の中はショート寸前だった。みるみるうちに耳まで火照り、顔は真っ赤に違いない。

「お前の考えていることはお見通しなんだよ。だが、一緒に遊んでいる暇はない」

私の肩に乗せていた腕を外し、意地悪そうに言ってきた。

「か、からかいましたね、私のことを！」

本気にした私は残念に思いながらも、膨れっ面になる。

「勘違いする方が悪い」

ケラケラと笑いながら席を立ち、シュレッダーにかける書類を用意し始めた。先生は

時々、私の気持ちを知っていて、からかって遊んでいるような態度を取る。

先生が離れてからも顔の火照りは消えず、まだ温もりも微かにあった。ドキドキしているのが私だけなんてズルい。

先生が、常に男の魅力を取り戻したら仕事も舞い込むはずだ。依頼人の離婚騒ぎはもうお腹いっぱいだけれど、それにしても、相変わらず私のことは子供扱いから変わらな。興味がないとはつきり言われているかのようだ。

「先生って……過去にお付き合いした女性はどんな方でしたか？」

現在、お付き合いしている方がいないのはリサーチ済み。一人暮らしだと言っていた先生に念押しで確認して、洪々フリーだと教えてもらうことができた。今までお付き合いした方にもあんな風にかかったり、普段からは想像できないような無邪気な笑顔を向けていたのだろうか？

気になったら止まらなくて、つい口に出してしまった。

「仕事中にする話ではない。少なくとも、野上のようなお子様ではないことは確かだな」想像通りの返答で安心したと言いつ切るのは変かもしれないが、歴代の彼女たちが逆に私みたいなポンコツだったとしたら嫉妬するかもしれない。あなたたちが良くて、私は何がダメなのだろう？ と。バリキャリ美人ならば、私自身と比べても天と地の差があるから諦めもつく。

「お前の望む恋愛って何なんだ？」

私の顔を見ながら問いかけてきた。先生からこんな話をしてくるなんて、一体どうしたのだろうか？ 先程の流れだとしても珍しい。

「そうですね、私ももう良い大人ですし、学生みたいなお付き合いではなくて、大人の恋愛を試みたいのです」

週末には終電寸前までバーで飲んで、彼のお部屋と一緒に帰って、二人で朝寝坊なんかもしたりして。翌朝には彼に朝食を作ってあげたり、半同棲して彼が帰るのを待つのも良いな。想像するだけで、ドキドキしてしまう。相手が先生だとしたら、尚更……

「お前の考える大人の恋愛とやらは、朝まで一緒に過ごしたり、セックスしたりするとかか？」

先生が座っている椅子の隣にいた私は、いきなり腕を掴まれ、顔と顔が接近する。綺麗な瞳で見つめられ、唇同士が触れそうな程の至近距離に心臓の鼓動がバクバクと急ぎ足で動き出す。

「セ、セック……」

「違うのか？ 何なんだ？」

ストレートな物言いに恐縮してしまい、赤面したまま動けず、反論もできない。お泊まりにはつきものかもしれないが、私はもっと心の繋がりが欲しいと思う。

「大人の恋愛だつて……そ、そんなことばかりじゃないはずですよ。職場恋愛して、結婚とか、そーゆーのだつて、憧れの大人の恋愛だと思いますが？」

「そうか？ とんだお花畑の頭の中だな」

正気に戻れないままに絞り出した答えを鼻で笑われた挙句、否定される。まあ、こんなことも日常茶飯事なので、さほどは気にはならない。先生は私の気持ちに気づいていないはずなのに、からかうだけだからかつては強制終了される。完全に相手にされていないのかもしれない。

友人に先生の話をするとは私はMだなんて言われる。しかし、私は先生が大好き。前途多難な恋だけれど……！

「お花畑でもいいんです、別に！ 何歳になっても素敵な夢を見ることは乙女の権利ですっ」

「権利を主張するのなら、いつまでも見習い気分でないで書類を間違えないように仕事をこなしてほしいものだな」

「……ううっ、それとコレとは別問題でしょ？ 酷い！」

はぐらかされた上に全く別の問題へと話題が振られる。

「ただいま戻りました！ あーっ、またイチャイチャしてる！」

「おかえりなさい！ イチャイチャしてるように見えます？」

「見えます！」
 事務所の扉を開けて元氣よく入ってきたのは、私よりも四学年下で弁護士のお卯の湯河原大地君。湯河原君は先生に憧れて事務所の扉を開けた一人で、現在は司法試験に向けて目下勉強中だ。

裁判所での先生の立ち振る舞いは、まるでドラマのワンシーンのように格好良く、傍聴席では法律関係の仕事を目指している未来の弁護士たちの目を釘付けにしていた。女性だけではなく、男性の法曹関係者たちまで魅了してしまう先生は尊敬に値する。

「誰がコイツとイチヤイチャするか！ さつさと仕事しろっ！」

注意を受けた湯河原君は苦笑いしながらも、デスクに座って次の仕事に取りかかる。

「先生、債務整理の書類作りに入りますね。それから、こないだの遺産相続の渡辺さんですが、つい先程、街中でばったり会いました。旦那さんの時みたいの問題が起きないように遺言書を書くお手伝いをしてほしいそうですよ。近いうちに事務所にいらっしやるそうです」

「……ふうん？ あのばーさんもうすぐ仏さんになるのか？」

「そんなことはないですよ、全然元氣ですからまだまだ先ですよ」

「だよなー！ あの乗り込んできた時の慌てぶりと元氣さから見て、あと三十年は生きそうだよなー！」

先生は本当に口が悪いのだが、悪気はないらしい。湯河原君と二人で笑いながら話している話題の渡辺さんとは、先日旦那様を亡くして、遺言書がなかったがために遺産相続で揉めた方である。

私有地を駐車場にしていたのだが、税金の支払い義務やその相続手続きなどなど、他にも色々問題があり、無事に解決したのだ。

湯河原君情報によると、先生は以前は大手事務所でスケールの大きく脚光を浴びるような弁護士をしていたとか。詳しいことは分からないのだが、そういう仕事の依頼が舞い込んだら先生もやる気が出るのだろうか？

「渡辺さんはいついらっしやいますかね？ お茶菓子とかが少なくなってるから買い足してきて良いですか？」

「そんなに急には来ないだろ？ それにお前、頼んだ書類はまとめたのか？」

「ま、まだです」

「だったら、そっちを先にやってから買い出しに行け！」

ギロリと鋭く睨み、資料で机の上を二、三度叩く。湯河原君とは楽しく話しているくせに私には真逆の冷たい態度を浴びせる。

私だって湯河原君のように先生に頼られたいし一人前にもなりたければ、法律関係の事務は難しくて息抜きが欲しくなる。

先生の事務所にお世話になってから半年が経つが、まだまだ分からないことだらけだ。以前も事務職だったとはいえ、区役所で働いていたのとは勝手が全然違う。

私の自宅は先生が借りている事務所のすぐ側にあり、先生が引越し作業を行っていた時にたまたま通りかかり、転んで怪我していたところを助けてもらったのが縁で今に至る。

先生には運命を感じたので一週間粘って勤務の許可を得てから、一ヶ月後に区役所を辞めた。

転んだ時に自転車も壊れてしまったので今は歩いて事務所まで通勤しているが、自宅から近いので区役所勤務の時よりも通勤時間がかかり短い。それに先生に毎日会える利点がある。

「区役所の方が安泰なのに、辞めるなんて馬鹿だな。うちの事務所は設立したばかりでいつ給料が払えなくなるかも分からないぞ？」

先生にはそう念押しもされたが、今のところ一度も給料の支払いが滞ったことはない。そうして私が加わってから二ヶ月後、再び事務所の扉を叩いたのが湯河原君だった。

「どこかにもいたよな、募集も出てないのに急に来て雇ってくれて奴」

先生はそう言っただけで笑っていた。

とりあえずこの『瀬山法律事務所』の従業員は先生と私と湯河原君の三人しかいない

のだ。

湯河原君が弁護士のお卵だけあってサクサクと仕事をこなすのに対して、私はいつまでも初心者扱いの、どちらかと言えば使えない部類の役立たずに近い従業員。

私は主に先生の秘書兼事務員で、湯河原君はドラマの世界でよく知られている法律事務を主に取り扱うパラリーガルとして、先生の右腕となり働いている。パラリーガルになりたいわけではないのだが、少しでもお役に立ちたくて少しずつ湯河原君の仕事のお手伝いもしている。

私は入社して半年が経つ今も間違いが多く、このままではいけないとは思いつつ、日々修業中である。

「先生、いるうー？」

ブラウン系の重めなクラシックな趣おもむきの扉を叩き、元氣よく飛び込んできたのは噂の渡辺さんだ。

「さつきね、湯河原君に会って遺言書のお手伝い頼みたいってお願いしたんだけど聞いたかしら？ 杏沙子ちゃん久しぶりね。これはね駅地下で買ったケーキよ！ このお店最近のお気に入りだね、週一で通ってるのよ。店員がまたイケメンで……！」

「あ、ありがとうございます。嬉しいです」

相変わらず話がノンストップだなあ。渡辺さんはいつも元氣で、先生は常にタジタジ

している。

「渡辺さん、こんにちは。ご依頼ありがとうございます。今日はひとまず、ご相談という形でよろしいですか?」

「はい、お願いします。先生は相変わらず、クールでイケメンね。こんなにイケメンなのに妻子がいないなんて残念だわあー。誰か紹介しましょうか? それとも、うふふ、杏沙子ちゃんが彼女なのかしら?」

「そんなことより、あちらでご相談に乗りますからどうぞ」

速攻に彼女という区分は否定された。渡辺さんを無理矢理に応接用のソファーに案内して、先生はスマートにこの場を立ち去る。

全く、顔色一つ変えないんだから。先生は何を言われても動じることはなく、誰に対しても冷静沈着。

渡辺さんは良い人だけれどお節介が過ぎて、来る度にお見合いの話を持ちかけたりするが先生はかわしてばかり。素っ気ない態度なのに渡辺さんも先生を気に入っているので、用事を作っては押しかけてくるのが日常。

先生は無愛想だけれども、とても親身になって考えてくれるし、渡辺さんみたいなクライアントの方々がご相談のある方にこの事務所を紹介してくれるパターンもある。

小さな事務所だが地域密着型というか、市民の味方のような事務所になっていると

思う。

私は先生に怒られもするが毎日楽しく勤務している。区役所にいた頃よりも居心地は良く、それに何より大好きな先生の側で毎日仕事をできることが幸せ——

「では遺言書に書く内容をもう一度考えてから、またいらして下さい。それから毎度申し上げてますが、事務員を甘やかす手土産は持参しないで下さいね」

先生は笑いながら言っているように見えても、目は笑っていないかった。

「あら、私は杏沙子ちゃんが好きだから買ってきてるのよ? 杏沙子ちゃんも湯河原君も孫みたくに可愛いんだもの。もちろん、先生のことも好きよ!」

うふふ、とニヤけながら、口に手を当てて笑っている渡辺さん。

「お気持ちだけ受け取ります。…:湯河原、渡辺様をお見送りして!」

「はいっ」

渡辺様のお見送りを頼まれ、元氣よく返事をした湯河原君。先生はめんどくさそうな態度をしている時もあるが、渡辺様のどんなわがままも聞いてあげている気がする。

私も先生の声にはすぐに反応してしまうが、湯河原君も負けずすぐさま立ち上がり、まるでペットの犬みたいだ。渡辺さんの帰り際に再びケーキのお礼を言い、バイバイと手を振ってくれたので私も振り返した。

出口の扉まで送るはずだった湯河原君は外に連れ出されてしまい、しばらくは帰って

来られない予感がする。

「また渡辺さんは湯河原を連れ出したか！」

「……多分ですけど、家まで送ってもらおうつもりでしょうね？ 以前もそうでしたから」
「困ったものだな」

渡辺さんは湯河原君のことも気に入っていて、商店街にある自宅まで話をしながら送ってもらおうのが毎回のお決まりみたいなおものである。呆れ顔の先生は無愛想な顔をして、ケーキの箱を開けて覗き込んでいる。先生が唯一食べられるのは、ブルーベリーソースがかかっているレアチーズケーキ。

「野上、コーヒー」

このお目当てのケーキがあるかどうかを確認してから箱を閉じて、私に向かっていつもの偉そうな口調で言い放つ。

甘い物は苦手だが、ブルーベリーソースがかかっているレアチーズケーキが大好きな先生は本心では喜んでいるのだ。

渡辺さんも先生の好みを私からリサーチ済みなので、他のケーキに密かにお気に入りを紛れ込ませて購入しているのだ。淹れたてのコーヒーと共にお皿に載せたレアチーズケーキを差し出すと、先生は何も言わずに食べ始める。

ケーキを食べている先生の姿はとても貴重なので、写真に収めたいくらいだ。カップ

の柄を持つ仕草とケーキを口に運ぶ仕草が綺麗で見惚れてしまう。

「……何だ？ ジロジロ見るなよ。このケーキが良かったのか？」

「ち、違いますけど！」

「物欲しそうな顔してる。そんなに食べたいなら一口やるよ。……ほら？」

先生はフォークでケーキを一口分にサクッとすくい、私の口の前に差し出す。目の前に差し出されたものの、本当に食べても良いのかな……？

「俺が使ったフォークが嫌なら、自分で持って来い」

先生からこんなことをされたのは初めてで、私が戸惑っていて食べられずにいると、先生は差し出した手を引っ込めてケーキを自分で食べてしまった。

「な、何でくれなかったんですか？」

「お前が俺のフォークが嫌で食べなかったからだろ！」

「嫌じゃないです！ 食べたいです！ ……早く食べさせて下さいっ！」

ガツカリした私は先生に反論して、溜め息を吐かれながらも再度差し出されたケーキをパクリと食べた。甘酸っぱいブルーベリーソースと濃厚なレアチーズが口一杯に広がる。

「もう、やらないからな。他のケーキにしろ」

そう言って私の唇についたケーキをティッシュで拭いた瞬間、先生の指が唇に触れた。

こうして子供扱いされていても、ほんの些細な触れ合いにドキッとさせられる。

湯河原君がいない時はこうして私のことを構ってくれるが、彼がいると素っ気ない態度を取ってくる。これは先生がいつも言っている『暇つぶし』ということなのか、それとも少しは好意を持ってってくれていると思っ*て*いいのだろうか……

「何だよ？」

そんなことを一人で考えていたら、思わず先生の顔をじーっと見つめてしまい、先生に睨みつけられる。

まるで彫刻のように整った顔立ちだが、睨みつけられると鋭い眼差しに怖さを感じて、思わず目を逸らす。目の前に立ちほだかる先生の前で、私は右下辺りを見て目を合わせずにいた。

「……っひゃ……！」

先生の左手が私の右頬に触れ、変な声が出る。そのうえ頬に火照りを感じ始めて、ますます顔を上げられなくなった。

先生は一体何がしたいんだらう？　これまで頬など触られたことなどないので、緊張感が漂う。

「頬にもケーキがついてる。全く子供じゃないんだから」

左手の親指で頬をなぞり、文句を言いながら自分の席へと戻ってしまった。

このシチュエーションはキスされるかも……？　なんて、思わず身構えた自分もいて非常に恥ずかしい。

先生となら、キスもしたい。先生に限って職場でのキスも抱擁もありえないだろうし、そもそも私になんて興味がないのだから妄想にしても非常識だったと思ひ直す。

「……野上、キスされるとでも思ったか？　妄想ばかりしないで仕事に戻れ」

「し、してません！」

頭の中を覗かれたかのようにピタリと当てられ、クスクスと面白がって笑っている先生が憎らしい。

いつの日か、先生と対等に向き合えるようになりたいと願う。日々、恋心は膨らんでいくばかりで胸を締めつけさえするけれど……距離感はずっと縮まっていると思う。

「野上みたいな恋愛経験の少ない奴が甘い言葉に騙されて結婚詐欺に引つかかるんだろ
うな？」

「……はい？」

心中穏やかではなく、まだドキドキの余韻が残っているというのに先生ときたら、突拍子もないことを言葉に出した。先程のやり取りなどは忘れたように先生はパソコンを弄りだし、並行して仕事用のスマホも操作している。

確かに恋愛経験も少ないし、先生から見たら子供かもしれないけれど、引つかかるか

どうかは別問題でしょう？ けれども、私には詐欺グループの一員に騙されたという前科があるので一概に否定はできない。

「恋愛経験は別問題でしょ？ 要は結婚願望が強くて焦ってしまったか、本当に好きになっただけじゃないですか？」

「そうか？ じゃあ、例えばだが……野上の憧れている人が三百万振り込んだら結婚するぞって言ったら、するか？」

「したいです！ 三百万で結婚できるなら！」

「お前は本当に持って来そうだから、怖いな。それに何度も騙されるんじゃない」

冗談だと分かっているも身を乗り出し、先生に近づいて返答した。そのことに対し、コツンと拳で軽く叩かれる。でも私は憧れの人、イコール先生と結婚できるなら三百万を出しても惜しくはないのだ。

結婚詐欺に遭った方々だって、貢いでいると気づかない振りをして、相手の方と結婚しなかっただけなんだから。

恋愛に吸い込まれてしまえば、純粹な気持ちほど厄介なものはない。

抜け出せない負の連鎖から気持ちを断ち切ることができるのは、裏切られたと気づく時だけだ。

「憧れの方が用意しろと言うならば用意しますが、裏切られた時はとてつもない絶望か

らの怒りを感じると思いますよ？」

「うん、だろうな？ 知り合いの知り合いから結婚詐欺の相談に乗ってほしいと持ちかけられたんだ。突然だが明日の夜は空けておいてくれ。クライアントの仕事が終わってからになるだろうから、夜は遅くなるかもしれないが……一緒に話を聞いてくれるか？」

「良いですよ、夜遅くて帰り道が怖いので先生が送ってくれるなら！」

願ってもない、お近づきになれるチャンスに浮き立ってしまふ。

「はいはい、ラーメンに餃子もつけます」

「……どうせなら、イタリアンが良かった」

遅い時間の相談だし、いつもなら湯河原君に同席を頼むのにそうではないということとは相手が女性だと思われる。

以前、セクハラ問題で相談に来たクライアントの時も女性だったために同席を要求された。債務整理などを除き、女性の心身に関わる事は女性を同席させようというのが先生のポリシーらしい。心を落ち着けながら、少しでも相談しやすくしたいと考えているのだと私は勝手に解釈している。

「先生、明日は仕事が終わったら居酒屋とかでも良いですよ？」

あわよくば、朝帰りとか！ 明日が楽しみだ。デートではないけれど、先生と二人で過ごせる貴重な時間。

「帰ってから食べるのが面倒だからラーメンじゃなくとも簡単に食べられる物を食べて、送り届けるだけだからな」

「そんなのは明日の霧囲気で変わりますって！ あー、楽しみ！ よし、仕事しようっと！」

呆れ顔の先生はさて置き、思いがけず、恋愛の女神様が微笑んで応援してくれているようだ。

絶好のチャンスは確実に掴み取りたい！

第二章 不意打ちのキス

翌日の夕方六時過ぎに、結婚詐欺に遭ったというクライアントの女性が訪れた。彼女にとってデリケートな内容かもしれないので、話を聞く際は少人数での指示がくだされる。先生の指示に従い、湯河原君は定時で帰り、事務所の中は私たち三人。

私も同じような詐欺に遭ってしまったので、間接的にでも何かお役に立てたら嬉しい。資格も何もないので、直接関わられるわけではないけれど……

クライアントの女性は体型もスラリとした目鼻立ちの整った美人さんで、結婚詐欺にクラライアントの女性に話を聞きながら、ノートパソコンに時系列や内容を打ち込んでいた。なんて面白いそうに見えないのに……というのが第一印象だった。

「……なるほど、開業資金と言われてお金を差し出したあとに彼がいなくなったのですね」

「そうなんですよ、スマホも繋がらなくて。どうやら、以前の番号を解約したみたいなんです」

先生は真剣に話を聞きながら、ノートパソコンに時系列や内容を打ち込んでいた。

「そうですか。警察に被害届けを出したのですか？」

「出してはいけません。色々調べたら、民事事件にして弁護士さんに相談した方がお金だけでも取り返せるのかなって思ったので……」

「もちろん、全力で取り返しますよ。……ただ、貸したお金の使い道が他の用途だったという証拠や初めからあなたと結婚する気がなかったなどの証拠が必要になります。できる限りの証拠を集めていただけますか？ 集まり次第、策を練りましょう」

「お願いします！」

クラライアントの女性の名前は吉田^{よした}さん。騙した男性は自分のことをカフェ経営者だと偽っていたが、実は雇われ店長だったという。私は二人のやり取りを聞きながら、自分なりに手書きのメモを取っていた。

先生はと言えば……年齢が私とさほど変わらない美人の女性からの依頼だと知ってい

たからか、髪型も整えていて、どこからどう見ても良い男すぎる。好みのタイプの女性なのか、受け答えがいつもに増して丁寧だったりもする。

そして何より、わざわざ専門店に向いて手に入れた高級豆を自分で挽いて落としたコーヒ―。更には有名パティスリーのケーキまで購入している。仕事中に買いに行かされ、経費で落とさなくて良いからと先生が自分の財布からお金を出していた。

私と湯河原君の分も買っていいと言われてそうしたもの、先生の好みのタイプというだけでいつもの相談時に出すお菓子とは違うことを私は不満に思う。……そう、言葉には出さないが、私はヤキモチを焼いている。

クライアントの吉田さんの相談が終わっても嬉しそうに話をしている先生が憎らしい。吉田さんもブランド物のコーヒ―カップを持つ姿が綺麗で様になっている。

先生には美人さんがお似合いだってことは百も承知だけれども……私は諦めたくない。吉田さんが事務所を出たあとに私は先生との食事の予定があるのだから、そう自分に言い聞かせて、その場を耐えた。

「もうすぐ二十一時か。予定よりも遅くなって悪かったな」
「きちんと送ってくれば問題ありません」

予定よりも遅くなったのは先生が吉田さんと話し込んでいたから。何故、そんなことに気づかないのだろう。それほどまでに吉田さんが気に入ったのかな？ 悔しいけれど、

目の前の美女になんて勝てるはずがないのだからとやかく言うつもりもない。

「お腹も空いただろ？」

「空き過ぎました。ご飯食べたいです」

「はいはい、連れてってやるから。ほら、行くぞ」

バッグを取ろうとした時に、不意に先生から頭を優しくポンポンと叩かれた。私は湯河原君がいない時に与えられる、ご褒美の甘さに慣れていないので、驚いてバッグを床に落としてしまう。

「仕方ない奴だな」

先生がそう言って、私のバッグを拾って手渡してくれる。私の心臓の鼓動は速まるばかりで、収まらない。そんな何気ない仕事にときめいて呆然と立ち尽くす私を事務所の入口で待ちながら、先生は呆れ顔だ。先生にとっては些細なことでも、私にとっては心臓に悪い位にドキドキするシチュエーションなのだ。

事務所を出たあとは先生の車の助手席に乗せられ、ネオンが輝く街中を車で走る。車で先生と二人きりになるのは二度目だが、緊張してしまい言葉も出ない。

幅広い年代に大人気のパールがかった黒のハイブリッド車の中は綺麗に掃除されていて、無駄な物は置かない主義の先生の車は爽やかな良い香りが漂っている。

「いつもの威勢はどうした？ 取って食ったりしないぞ？」

立ち読みサンプル はここまで